

レポートの書き方について

～レポートの体裁と文章の書き方～

情報を正確に伝える、考えを的確に述べる、などの技術が技術者として求められる。ここでは理系の作文技術について学ぶ。理系の作文技術とは心情の変化などをつづる文学的な作文とは異なる技術である。そして、ほとんどの学生にとって、これから学習し、身につけるべき重要な技術である。

1. レポートの体裁 ～左右に2本の線があるように～

レポート用紙に文章を書くとき、句読点や気分？で改行する学生が多く見られます。そうするとレポート用紙の右側は不ぞろいになります（人によっては左側も）。ホームページなどを作成する場合はこのように書くことがあります。一般的に文章を書く場合は左右をきっちりそろえて書きます。レポートでは左右をそろえて書く習慣を身につけましょう。

具体的にはレポート用紙の右側と左側にそれぞれ鉛筆で線を引きます。位置は用紙の端から20～25mmくらいがよいでしょう。あとは文章をこの線で折り返すこと。最後に鉛筆で書いた線を消しましょう。慣れたらこの作業は不要です。

左右または上下の何も書かない領域を余白（マージン）といいます。ワープロでも余白の初期設定は30～35mmになっているので20～25mm程度に設定し直してから書くようにしましょう。

2. 文章の構成

意味のあるひとかたまりの文をセンテンスといい、内容的に連結されたセンテンスが集まるとパラグラフ（段落）になります。文章を書く場合は一つの内容についてパラグラフとしてまとめて書き、別の内容を書く場合はパラグラフを分けるのが一般的です。このとき、パラグラフの最初は必ず1字下げる（空ける）こと。

一つのパラグラフでは一つのトピック（小主題）についてまとめます。パラグラフの中には、このパラグラフの中で述べている内容を要約して述べた文（センテンス）が含まれるのが通例であり、これをトピックセンテンスといいます。

トピックセンテンス以外にパラグラフに含まれる文は、

- (a)トピックセンテンスをさらに詳しく説明するもの
- (b)そのパラグラフとほかのパラグラフとのつながりを示すもの

でなければいけません。トピックに反する内容を書くと、そのパラグラフが脇道にそれてしまい、分かりにくくなります。

また、トピックセンテンスはパラグラフの最初に書くことが一般的です。そうすることで、このパラグラフでは何をいいたいのかが明確に示すことができます。ただし、あくまでも原則論であり、必ず最初に書きなさい、という訳ではありません。最初にパラグラフとパラグラフをつなぐ文を書く場合は、必然的に第2文以降にトピックセンテンスを書くこととなります。

パラグラフごとに意味のある文章だとしても、パラグラフごとに全く独立しては全体として読みにくい文章になります。前後のパラグラフは関連性があることを書くことが一般的ですが、逆説的に述べる場合、話を変える場合などもあります。そこで、文章をつなぐ言葉を考えましょう。直前で述べている文章に対して、「そこで」「しかし」「次に」「故に」などがあれば、読む人は予測をもって読むでしょう。こうすることで読みやすい文章になります。

箇条書きは自分の主張する点をわかりやすくする点では便利なテクニックです。しかし、全てが箇条書きだと逆に読みにくくなります。箇条書きは論点を際立たせたい場合、文章としてまとめにくい場合などに限定して使いましょう。

3. 考察の書き方

自分なりの実験に対する考えをまとめるのが考察です。ここで文章を書く能力を身につけます。逆に言えば、考察をさぼってしまい、何も考えずに書くと、いつまで経っても文章を書く力は身に付きません。ここがレポートで最大のがんばり所です。

考察で何を考えるか？一つは実験内容そのものについて、もう一つは文章の構成についてです。この2つがかみ合うとよい考察になります。文章の構成方法について次に説明します。

起承転結がよい文章の見本ですが、レポートでは転の部分が難しいので「始め」、「中」、「終わり」の3部構成で考えましょう。「序論」、「本論」、「結論」と言い換えてもよいです。それぞれ、以下のように書きましょう。

序論・・・実験の全体をまとめます。概要とか概観などともいいます。本論のための呼び水になります。

本論・・・ここが考察の中心部です。

結論・・・最後に考察の内容をまとめ、自分なりの結論を出します。自分が最もいいたいことをまとめるところです。

ここで重要なのは本論で書く内容を決めてから書くことです。慣れていないときはなおさら最初に文章の構成を組み立ててみることを勧めます。以下の手順で行うとよいでしょう。

- (a) まずは書きたい内容あるいは書くべき内容のキーワードを挙げる
- (b) 次に、各キーワードをトピックごとにまとめる
- (c) 最後に、文章の流れを考えてトピックを並べる

ここで考えなければいけないのが、トピックの内容の大きさです。これまで述べたように、一つのトピックについて一つのパラグラフを書くことになりませんが、あまりに広すぎる内容や細かすぎる内容をトピックとして選択すると、書きにくいばかりか、読みにくい文章になってしまう恐れがあります。言い換えれば、適切にトピックを見つけることができるかがよい考察をかくポイントになります。慣れるしかないといえそれまでですが、パラグラフの文字数としては200～300字を目安にしましょう。

大事なことはキーワードの取捨選択をすることです。どうしてもまとまらない場合は捨てるキーワードが出てくるかもしれません。逆に、あるトピックを説明するためにもっと詳しい説明が必要になる場合もあるでしょう。ここは誰もが苦心するところです。

本論で書くことが決まると、序論で書く内容も決まります。例えば、

「・・・以上の実験より、テストの使い方について習得した。以下にテストの使い方について気がついた点をまとめ、次に測定精度について述べる。」

と書くと、本論で何を述べるのか、読む人は予測をもって読むことができるので読みやすくなるはずですが。

書いてみたらうまくまとまらなかった、ということになるかもしれません。その場合は、いさぎよく書き直しましょう。

4. 最後に

理系の文章では文体は文語調になるため、「～である。」のような言い切る語尾になります（「です、ます」はあまり用いない）。レポートでも同様です。言い切るだけの自信が自然に身に付くようがんばって下さい。

参考文献

- (1)木下是, 理系の作文技術, 中公新書